

七日参り

竹中尚文

人と出会う中で私が坊さんだとわかると、その人の悲しみを聞くことがよくあります。その悲しみとは、大切な方が亡くなられたことです。時に、悲しみの中にのみ生きる人がいます。それは残念なことです。大切な人が亡くなったのだからこそ、それまでになかった新たな人生にも遇ってほしいと思います。仏様に出会うことによって、新たな一歩のきっかけになるかもしれません。私が参る七日参りは、正信偈をあげて御法話をします。このお参りで、人が仏様に出会うご縁になり、大切な人の死が縁者の悲しみだけで終わらせない生き方になればと思います。それは、悲しみを断ち切る生き方ではなく、内に深く悲しみを包み込んだ人として生きることだと思っています。

四十九日(七七日)

1. どう生きていくのか

今回で、七日参りの最終回です。大切な方が亡くなって49日が過ぎる頃は、悲しみがさらに深まるように感じます。かつて仏教学の碩学であった長尾雅人先生が、奥様を亡くされて四十九日の頃、「悲しくて、悲しくて、やりきれない」とおっしゃっていました。

仏教というのは、悲しみを忘れさせてくれる教えでもなく、悲しみを乗り越えて行く教えでもありませ

ん。その悲しみの中で、真実に出会い、それによって人生の本質に気付いて生きてほしいと思います。その真実とは本願であろうと思います。それは亀井勝一郎氏の言う邂逅(かいこう・であいの意)と謝念(しゃねん・ありがたいの意)だと思っています。(この言葉は亀井氏の言葉だったように思いますが、どこに出ていたか忘れてしまいました。)

2. 本願

本願についてお話をしましょう。菩薩は願をおこして、その願が完成して仏に成るのです。願を立てたとき、それが完成しなければ仏に成らないと誓うので、誓願ともいいます。法蔵菩薩という菩薩は、人々を必ず救いとる、すなわち仏にするという願をたてて、その完成によって阿弥陀仏となったのです。この願を本願といえます。

この本願に遇うのは、信心いただくことです。阿弥陀仏が私を必ず救ってくれるという映像もなければ、契約書也没有せん。しかし、必ず救ってくれるのだと思えるところに、信心があるのです。そこに「ありがとう」という言葉が出るのです。それが邂逅と謝念ということだと思います。

ここで少し、触れておきたいのが本願に「遇う」と書きました。会うではないのです。遇うと言うのは、私の意思で会うのでは、ないのです。

3. 秋雄さんの死

本願に遇うと言うことについて、具体的な例で話を進めたいと思います。

昨年のお盆に、秋雄さんが85歳で亡くなりました。枕経の依頼の電話がありましたが、私はお盆参りの最中でした。少し遅れて、枕経をあげに駆けつけました。私は枕経をあげるとき、「この人はどんな思いで息を引き取られたのだろうか？」とか「どんな思いで人生を生きてこられたのだろうか？」と思います。

秋雄さんの場合、「これで長男さんに会えるな」と思いました。息子さんは30年程前に亡くなりました。冬の信州の山での遭難でした。ご両親は力の限り捜されました。いろいろな方に頭を下げた捜索して貰いました。ずいぶんと親身になって探して下さった方も多かったそうです。きっとご両親の悲しみに触れての行動であったように思います。しかし、遺体が発見されるのは、春の雪解けを待たねばなりませんでした。ご両親は、長く厳しい冬を過ごされました。私は過ごしたと言いましたが、ご両親には時間の経過の記憶もないかもしれません。人はあまりに深い悲しみにいる時、時間の経過に対する意識がないように見えます。それ以来、この夫婦は信州の山にたびたび足を運ばれました。次男さ

んも一緒だったり、次男さんの家族も一緒だったりしました。

それから十年ほどが過ぎた頃に、この秋雄さんは脳梗塞に罹りました。命は助かりましたが、言語と運動機能が不自由になりました。言語訓練の一環で、歌を歌うことを薦められました。秋雄さんは歌が不得意でした。しかし、『正信偈(しょうしんげ)』をあげられるようになりたいと、懸命に練習をされたそうです。そして『正信偈』をあげられるようになりました。次は、仏壇の前まで歩いて行って、座って『正信偈』をあげたいと、歩行訓練に取り組みました。秋雄さんは仏壇の前に座れるようになりました。

私がお参りに行くと、秋雄さんは静かな笑みを浮かべて迎えてくれます。もう信州の山には登れなくなりました。息子さんの祥月命日のお参りの折に、私が信州の山に行ってお経をあげてこようかと提案しました。ご夫婦で喜んで同意して下さいました。

私は信州の山に足を運びました。地図に印をつけてもらった場所に到着して、リュックサックから法衣を取り出して、身にまといお経をあ

げるべく、崖の上から下を見下ろしました。すぐにお経の声が出ませんでした。

ざっと 3~400 メートルはあろうかという崖です。息子さんは、ここを滑落したのでしょうか。雪庇を踏み抜いて、雪ともに落ちたのかもしれませんが。どんな最後だったのでしょうか。彼はどんな思いをめぐらせたのでしょうか。この崖を見下ろしたご両親は、どんな気持ちだったのでしょうか。私は、しばらくお経の声が出ませんでした。

このような経緯があって、私はこの秋雄さんの枕経で「息子に会える」と思ったのでした。ところが、七日参りを重ねるうちに、私の思いは変わりました。秋雄さんは「ありがとう」と言って往かれたようにおもいました。この私の思いを話すと、奥様は微笑んでしつかりとうなずかれました。

4. 本願に会う

秋雄さんは既に本願に遇っている自分に気付いていたと思います。決して本願に会いたいと思って人生を歩んでいらっしやったのではありません。最も望まなかった長男

の死に遭遇してしまったことで、本願に遇われたのです。お仏壇の前で『正信偈』をあげていたのは、極楽浄土に居る息子を思っていたのでしょう。極楽浄土で仏と成った息子に思うことができたのでしょう。そのことを確信されていたように思います。極楽浄土での再会は必然のことですから、臨終のときに再会を思わなくてもいいでしょう。

そうすると、臨終のときにはこれまでの人生での奥様への感謝の気持ちを思われたのではないのでしょうか。次男さんへの感謝、次男さんの奥様への感謝、お孫さん達への感謝であったと思います。秋雄さんは、決して饒舌な方ではありませんでした。生前、みんなに「ありがとう」と言って回ったのではないかもしれませんが、この感謝の念は家族全員に伝わっていたように思います。

一般的に、家族の個々はそれぞれ異なった方向を見ているものです。しかし、心の奥底で繋がっていればいいのだと思います。秋雄さんの家族は、仏と成った長男が全員を結びつけていてくれたのだと思います。

「みんな家族でいてくれて、ありが

とう」と言ってこの人生を終えていくのは、ありがたいことです。

5. 「七日参り」の終わりに

大切な人の死に立ち会ったとき、「どうして死んでしまったの?」、「何故死んでしまったの?」と言う問いかけを耳にします。この問いかけは、すごいことだなと思っています。死の意味を問うているのです。背面にあるのは、自分の生きる意味であろうかと思えます。

人は、日常生活の中で生死の意味を問うことは少ないと思います。とても大切な人の死は、私の生きる意味を問う機会を作ってくれたように思います。それが「ご縁」だと思います。「ご縁」というのは始まりです。「七日参り」の連載はこれで終わりますが、これからが自分の人生の意味を問う心の旅の始まりです。仏法に耳を傾けて下さい。すぐに明確な答えが出るかどうか分かりませんが、それぞれの私の人生を終えるときに、あのご縁のおかげで意味ある人生を過ごせたと思われるように願っています。